

がんばる同窓

4



大手企業と外資系企業

私は化学科を卒業した後、ごく普通に大手企業に就職しました。毎日2時間かけて川崎まで通勤し、塗料で真っ白になりながら、光沢がある水系塗料の研究開発をしていました。成果を出してスケールアップの計画が持ち上がりましたが、当時の部長の一言で計画がなくなり、大手企業より研究成果を世の中に出せる中小企業で働くことを考えました。そして、大手企業を退職し、1か月休養した後、ドイツに本社がある外資系分析機器販売会社に転職したのです。いきなり大手企業を辞めてしまい、聞いたこともない外資系企業に就職したので両親や友人は驚いていました。でも、その会社は、オートアナライザーというアメリカでは教科書にも掲載されるくらい有名な分析機器を扱っていたのです。世界で初めての自動分析機器なので、名前がオートアナライザーといい、血液成分分析で日本の多くの病院にも入っていました。現在は、主に海水や上下水などの分析機器として販売されており、私は分析メソッドの開発をしながら、機器が納品された日本全国津々浦々に3日くらい出張して顧客トレーニングを行っていました。9年間務めました。上司と開発した分析方法が水道法に採用されたり、海外出張もあり、充実した会社員時代でした。

理系なのに行政書士？

仕事は順調ではありましたが、体が悲鳴をあげ始め、年末で会社を辞めることを決意しました。そして通信講座で弁理士の勉強を始めました。しかし、選択科目である化学の範囲の広さから、免除のために行政書士を先に勉強することにし、通信講座で数か月猛勉強して合格率2.89%のときに運を使い果して合格しました。合格はしたものの何をやろうか、と思案したとき、介護事業所を経営している母から相続で揉めている話を聞き、「そうだ、日本に遺言を広げよう」と決意し、半年

行政書士

中野 千津香 (平1理・化)

後に無謀にも開業してしまいました。これには家族は呆れていました。初めての仕事は、理科大の同級生のお父様の相続でした。理系なのになぜ行政書士かという質問はこれまで何度も受けましたが、家族以外は同級生からの質問が初めてでした。開業してからの11年間でいったい何度質問されたのでしょうか。会社員のときよりも収入は落ちたので成功しているとは言えませんが、私には理系行政書士の仕事があるのだと思います。

行政書士の仕事

行政書士は、許認可業務や外国人関係など幅広い仕事がありますが、私は相続、遺言、成年後見をメインに仕事をしています。4月に理窓会からくり会で「遺言のススメ」と題して遺言の大切さについてお話させていただきました。遺言や後見の講師をさせていただく機会の中で、今までいくつも研修を受けてきたけど先生の話に心を打たれました、と感想をいただき、微力ながらお役にたっていることを嬉しく思うこともあります。仕事上、認知症高齢者など、様々な人の一生に関わりながら仕事をしているのですが、ご自宅や施設で暮らす方の病気や死と向き合うことも少なくありません。緊急で病院から電話がかかることもあるため、携帯を常に気にしながらの24時間営業です。人に寄り添って仕事をするのは、会社員時代にはなかったことで大変なこともあります。私には向いているようです。

理窓会の皆様とは全く違う仕事をしつつ、理科系の柔軟な考え方は持ち続けていけるように日々研鑽を積んでおります。皆様の今後のご活躍を祈念し、こんな卒業生が一人いることを知っていただけの機会をいただいたことに感謝いたします。

(なかの千津香行政書士事務所)

就職

大学卒業後、国立系の大学院に進学し、その後、産業機械のモーションコントローラーを製造しているFANUCへ就職しました。そちらでは、CNCと呼ばれる工作機械のコントローラー部分のハードウェアの設計開発に携わっておりました。

転職し、地元愛媛へ帰郷

現在は(株)日鋼今治という、給排水衛生設備、空調換気設備、上下水道等の機器や資材を販売する会社を立ち上げ、代表取締役をさせていただいておりますが、ここに至った転職について、また、会社立ち上げ当時の事について触れさせていただければと存じます。

FANUCに入社4年ほどたち、仕事も面白くなってきたところでしたが、田舎の父より、どうしても家業である配管材料の卸売の会社をもう一つ立ち上げようと思うので、その会社立ち上げに力を貸してくれないかと懇願がありました。今まで、決して、息子の自分をお願いをしてくるとは予想だにしていなかった父から、まさかの懇願でした。その時、本当に悩みました。しかし、熟考すればするほど「考えれば考えるほど、まず今の会社を辞めることなどできない」と思いつつも、ほぼ、何も考えず、カンと情だけで、脱サラリーマンを決意し、地元愛媛へ帰郷したのです。この決断が、今思えば、人生の大きな決断の一つだったということは、言うまでもありませんが、会社経営はおろか、家業とはいえ配管材料などは全く理解しておらず、本当に0からのリスタートでした。

まず、商品である配管材料を覚えることから始まり、パイプ等の配管資材の現場への配送業務。いわゆる下積みの経験から、容赦ない父や先輩社員からの洗礼を受けました。当時、会社を辞めたことを後悔しない日はないくらい、とてつもなく後悔をする日々が続いたのを記憶しています。

そして、1年ほどが過ぎたところで、頼りにしていた父がガンのため急死し、後悔どころではなくなりました。

(株)日鋼今治 代表取締役

近藤 吉郎 (平9理・物)



まさに青天の霹靂でした。

このとき、生まれて初めて「自分がしっかりしないといけない!!」と強く感じたのでしょうか。そこからの数年は、思い出せないぐらい一心不乱に仕事にまい進しておりました。

社員としてのスキルも未熟な段階で、いきなり会社経営という未知の業務が降ってきたのです。

当時、どんどん出てくる問題に対しては「客観的に観察して、本当の問題点を見つけ出し、それに対する答えを導くということだけだ!!」と自分に強く言い聞かせて、様々な問題に、真正面からぶつかってゆきました。

当時は必死すぎて、感じることもなかったことですが、今思えば、この時の自分が、自分なりに様々な問題に直面し、それらを乗り越えられたということは、理科大をはじめとする理科系の環境、特に研究室での昼夜問わずのような実験生活などのおかげだと強く感じ入る次第です。

特に、IT環境が脆弱であった弊社の基幹業務システムや経営指標の分析などは、非常に理科系的なセンスが役に立ったのではないかと、今となってではありますが、心から感じております。

おわりに

地元へ戻って12年ほどが経ち、仕事も何とか落ち着いてきたところで、先日、初めて地元愛媛にて理窓会に参加させていただきました。そこで、久しぶりに、自分が理科系出身だったということを再確認させていただきました。また、このように広い世代にわたり、先輩方が多くいらっしゃることも確かめることができ非常に有意義さを感じました。

今後はできる限り、このような会に参加させていただき理科大を通じた地元愛媛でのネットワークの一助となれればと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。